



第 4 2 号
 発行所
 日本内観学会
 〒851-0494
 長崎市布巻町165-1
 三和中央病院

第四一回日本内観学会大会・ 第七回国際内観療法学会大会のご報告



副会長 森 下文

平成30年5月18日～20日、第41回日本内観学会・第7回国際内観療法学会大会が佛教大学紫野キャンパスにおいて開催されました。今回の学会では、中国からの一般演題の応募が30題近くもあり、中国の演題発表の特別会場を2つ設ける程の盛況でした。中国での内観療法の広がり興味・関心の高さを実感することができました。また中国ばかりでなく韓国やスリランカ、アメリカ、フランスからの参加もあり、各国からの参加者にはシンポジウムやランチョンセミナー、特別鼎談において話題提供をしていただきました。内観学会の歴史を振り返っても例のない国際色豊かな学会であり、様々な国の方々がまさに大会テーマに謳われているように「こころの平安と社会・心理療法としての内観を考える」学会になりました。

本大会で特筆すべきは、長年の懸案事項であった日本内観学会認定の内観面接士資格認定第一回研修会（内観セミナー）が開催されたことです。

〈初級コース〉では「内観の体験談及び内観療法の紹介」、「内観の基礎」の講義後、実際に〈内観実習〉に参加、〈中級コース〉は、〈初級コース〉の受講後、さらに専門的な3講義を受講するものでした。参加者はコースに応じて所定のポイントを獲得し、今後の内観面接士の資格取得に備えることとなります。多数の参加申し込みがあり、当日は急遽座席を増やして対応しましたが、それでも人数制限をせざるを得ないほどの盛況でした。内観療法と内観面接士資格についての世の中の興味・関心の高さが分かる研修会となりました。

本大会では数々のシンポジウムや鼎談、記念講演も行われました。特別シンポジウム「中国の内観療法の現況と内観は中国でどのように役立っているか」や特別鼎談「国際化に当たって内観に期待するもの」（英語版）やメインシンポジウム「内観の今とこれからを考える」は、まさに国際内観療法学会にふさわしい白熱した議論が繰り広げられました。特別鼎談

「内観は無意識をどう扱えるか」夢の導入を巡って「も大盛況でした。聴衆から「吉本伊信とエンゲルが対談しているようだった」との感想も聞かれ、内観の新しい展開を予感させるものとなりました。佛教大学田中典彦学長による記念講演「眼（まなこ）をひっくり返す」では、眼（まなこ）はずっと外を向き、人のことは良く見えるが、一番近くの自分のことは見えていない。自分の眼（まなこ）をひっくり返して自分自身を見ることが宗教の根底にある」という内観に通じる講演をいただきました。記念対談は、井上ウイマラ（高野山大学教授）と真栄城輝明（大会長）によって、特にテーマを決めず、来世はあるのか？、人生の最後が近づくと亡くなった人が見えるようになる。自分の怒りに敏感になる。怒りを無理に抑えると必ず蘇ってくる。断食も三日目を過ぎると光が見え、光の世界に入る。といった自由な対談が行われ、最後に井上先生のお父様が家族に囲まれ、息子の井上先生の歌を聴きながら天寿を全うされる様子の映像に、会場は大きな感動に包まれました。

以上のように、国内はもとより遠路はるばる様々な国々からの皆さま、また本大会の開催に当たりお力添えをいただいた皆様のお蔭を持ちましまして、本学会は盛況のうちに終わりました。こころより御礼申し上げます。ありがとうございました。

記念講演

佛教学長 田中 典彦 先生

「眼(まなこ)をひっくり返す」

を拝聴して



水輪内観研究所 塩澤 研一

本年の内観学会は京都の仏教大学に於いて開催されました。

記念講演として仏教大学の田中典彦先生の「眼(まなこ)をひっくりかえす」と題してのお話しは、内観学会の会員に対してだけでなく現世に生きる人々にとっても極めて示唆に富んだものでありました。

田中先生がインドに留学した際に即興詩を奏でる僧侶との出会いの中の体験です。

この即興詩人たちは歌う前に、相手の人となりをよく聞いた後で、その人のためになる詩を奏でます。

田中先生が歌って頂いた詩の内容は次の様なものだったそうです。

「洗面器いっぱい塩水を張り あなたの顔を映しなさい おでこを3回とんとんと叩きなさい あなたの目の玉ころりと落ちる それをきれいに洗いなさい かちやかちやかちやと音がする 綺麗に洗ったその後で目玉をひっくりかえして入れてみよ きっと自分が良く観える」というものでした。

通常は目の玉は外を向いていますから、他人の事や外の事は良く見ることができません。でも自分の事はなかなか見えません。

仏教の本質はこの「自分を観る」ということが極めて大切なことであるとの教えです。

これは仏教という宗教的範疇にとどまらず、私たち人間全てにとっても極めて重要なことと言えるでしょう。

私たちは常日頃この自分を見る・反省する一ことなしに、自分の思い込みと誤解の中で生きており、その結果悩んだり苦しんだり、いらいらして日々を過ごしていることが多いのではと思います。

内観が仏教をその源流にしていることは周知の事実ですが、逆に言うならば「宗教」そのものも、人間の悩みや苦しみからの解放と自己の人格の向上をその目的としているわけですから、内観において宗教との関係性についてあえて取沙汰する意味はないのではと思うのです。言わば一体と言えるかもしれません。

人間は苦しみや悲しみの中で、とりわけ「死」というものを身近に感ずるとき、自ずと宗教的なものを感じるのではないかと思います。

私自身の内観との出会いもこのような体験があり、現在に至っています。私が内観に出会った20年前に私はリンパ腫という診断をされ、長野日赤に入院しておりました。遡ってその8年前の42歳の時には脳腫瘍との診断がなされたのですが、私が18歳のときに母親より「あなたは波乱万丈な人生を歩み、生まれてくる子は普通の子ではないよ。42歳で早死にするからね」との宣告を受けていました。

なんでも有名な易者さんに診てもらったところこのように言われたとのことでした。

事実、高校受験には失敗するわ、大学受験も志望校には行けず、大騒動の中で学生結婚、生まれてきた子は医療ミスにより最重度の障がいを負ってしまい、職場も3回の転職などこれ以上の不幸があるうかとの人生でした。

病氣も数えきれないほどの手術や入院で、骨折は7回など予言通りの人生でありましたから、42歳の時の「脳腫瘍」との宣告はいよいよ来るべきものが来た、という受け止め方でありました。

その時、取引先の高校の教頭先生から卒業式の記念講演をしてくれないかとお話しを頂き、単なる「業者」として出入りしていた私としてはそんな大役できるわけがないと一旦はお断りしたのですが、脳腫瘍との宣告もあり人生最後の講演もいかな、と思ってお引き受けしました。その高校は国内の問題ある生徒を集めて再教育するという映画化もされた私立の高校でしたが、何か感じて頂けることがあったのか、その後まわりの公立高

校からも講演の依頼があり、最後は最初の高校の入学式でもう一度講演することになってしまいました。

気がついてみると喉のつかえが消えており、病院での再検査では「腫瘍が消えています」との診断で狐につままれたような一件でした。

この時、私自身は「42歳で死ぬ」ということは私自身の古い意識が死に、新しい意識に再生する事であったのではないかとの思いでした。

それから8年過ぎ50歳になったとき足に大きな腫瘍ができ、座ることもできませんでしたので再び日赤に診察に行ったところ、血液内科に回され「リンパ腫」の疑いがあるとのことで様々な検査を行い、とりあえず足の大きな腫瘍の手術をすることになりました。

私「先生、リンパ腫って悪性ですか、良性ですか」医師「リンパ腫は悪性に決まっています。手術の後は抗がん剤と放射線治療に入ります」私「手術は受けますが抗がん剤と放射線治療は致しません。歩けるようになったら退院させて下さい」医師「・・・」

そんな会話の後3時間にわたる手術。もう片方の足からは10センチ四方の皮膚をそぎ取り移植。寝たきりの生活が始まりました。

42歳の予定が8年も伸びたのだからまあいいか。それにしても自分の人生は何だったのだろうかとの思いが募り、「どうせ死ぬなら自分の人生をおさらいしておかなければ・・・」そんな思いから、生まれてから今日までの自分の人生で出会った人とのことを再度思い返しながらの1週間が過ぎました。

まさしく内観そのものでしたが、7日目の夕方になりそれまで調べた人たちが私の枕元に集まってきます。(イメージの中で)

両親は娘が重い障がいを負ったことから「塩澤家の財産は跡取りのいないお前には継がせない。姉の子供に財産を継がせる」と公正証書まで作り、私たち夫婦は怒りの中で10年近い両親との絶交状態が続いていました。

後でわかったことですが両親がこの公正証書を作った日に娘は危篤状態に陥りとても助からない状態がつづきました。3カ月にわたる杜絶な闘病の末、気管切開をして痩せ細った娘を連れて飯綱の山にかえったときにはすでに雪がちらつき、24時間の介護の生活が始まりました。職も失いお金もなくいよいよ野垂れ死にか、というところから第二の人生がはじまりました。

すべてを失った中で誰にも頼れるところはなく、それでも必死になって生きてく中で農業生産法人、公益財団法人、株式会社など3法人の設立とのちの森クリニクの開設、水輪内観研修所の運営と、それまで活動の中心となっていた「水輪の会」を含め現在の事業が展開されてきました。

こんな理不尽な両親でしたが、病床の中でよくよく調べてみると案外かわいがって頂いた過去がよみがえってきます。そして今まで自分が正しいと思っていたことが必ずしも正しかったとは一概には言えず、懺悔の想いが募ってきます。そして号泣の中で体が燃えるように熱くなりベッドがぐっしょり濡れるほどの汗が吹き出しました。時間からすれば2、3分でしょう。それまで枕元に集まってきた人たちが闇の彼方にすーと消えていきます。その瞬間に「あれ、癌細胞も行ってしまった」と強く感じました。

翌日医師からは「細胞検査の時には癌細胞があったのだがねー、見つからないのです」との話。

退院してからこんな体験を内観学会の会員の方にお話ししたところ「それは内観というものです」とのこと。さっそく富山の内観研修所で集中内観を体験しました。

両親の事は病院での出来事である程度は許すことが出来てはいたのですが、まだ心のどこかにもやもやしたものが残っています。

最終日の7日目の夜、父親を自分の前に呼び出して問答をしてみました。父親は「俺が悪役をしていたことをお前は解るか」との答えが父親から返ってきます。「そうか音信普通の10年間で自分は今の事業をここまで発展させることができたではないか。親をあてにせずに・・・」その後、私は父親を引き取り5年間一緒に過ごすことができ、91歳で大往生を遂げさせることができました。

それから20年、「自己を深める」という内観はその後の私の人生を大きく変えることとなりました。

先の学会に於いて内観における原法、面接者の資格、宗教との関係等について多くつかの意見がありましたが、私は吉本先生の内観の姿勢(面接者に対して深々と全身全霊をこめて4回おじぎをしている姿)これが全てを言い表しているのではないかと思っています。

高みの目線で見るとはならず、面接者自身も常に自己を深め続けていくことこそ問われているのではないかと思います。

第一回日本内観学会主催研修会（中級）

（於…佛教大学紫野キャンパス）



内観面接士

土橋 義範

日本内観学会として初の試みとなる内観面接士認定制度ですが、その研修の機会の提供として今大会で内観セミナーが実施されました。認定制度初級の講座に続いて開催された中級セミナーですが、会場の佛教大学の教室は満席でパイプ椅子が運び込まれるほどの盛況でした。

中級一人目の講師は東京大学大学院教育学研究科教授の高橋美穂先生。「内観療法的作用機序と他の精神療法との比較について」とのタイトルでの講演でした。この講義は高橋先生の「内観というなんとなくあまいな営み」を言語化しようとする高橋先生の意思を感じさせる講義のように思いました。内観法を浮き彫りにする視点として「西洋的医学モデル対東洋的全人的モデル」「見えているものではなく見落としている者を観るのが内観」「問題を作っているのは自分であることに気づくのが内観」などのフレーズが印象に残りました。また面接者の役割についても言及されておられました。

二人目の講師は三和中央病院の塚崎 稔先生です。タイトルは「病院臨床における内観療法の導入／導入の過程と展開」と題して前半は三和中央病院で内観療法を導入することになった経緯とその後のお話を聞かせていただきました。後半は、医療と内観の課題として医療関係者が内観に触れる機会が少ないこと、内観法を他の学派に分かるような言葉で正しく伝

える重要性について触れておられ、内観の課題についての認識は高橋先生と共通するものがあるように感じました。また、内観の定型型と医療の実情とがうまくかみ合っていない実情があること。「外来的内観療法の確立」の必要性を訴えておられました。

三番目の講師は国立国際医療センター国府台病院心療内科の河合啓介先生です。講座のタイトルは「内観と医療／心身医学領域の適応例」でした。河合先生のお話で印象的だったのは、症状の根底に人間関係の葛藤や認知の歪みなどがあつたとしても医療技術が深化して良い薬とよい器具で治療ができるならそれはそれで良いではないか。現代医療の粋でもどうしても症状が変わらない患者に対しては心へのアプローチ（内観）が必要だとお話されていた部分でした。心と体の問題にそのどちらかに偏ることなく状態に応じて臨機に対処されようとする姿勢に心が惹かれました。また河合先生のお話で印象に残ったのは、治療で内観療法を使っても保険点数が付かない問題に対して患者に個室を利用してもらうことで経済の問題をクリアされておられるという現実的解決法を見出しておられる点でした。治療に際しての心と体へのアプローチのバランスといい河合先生の臨機な柔軟性を感じさせるエピソードだと思いました。

また、集中内観中の内観者の筋電図、皮膚温度、脳派を測っていると内観者がリラクセスするのは四日目くらいからだというお話でした。このデータから「内観の三日目の壁」や「内観は二日目から急速に深まっていく」という内観界の説を裏づけるように感じました。本学会で千石真理先生が深呼吸やエクササイズが内観の深化を早めるといった趣旨のお話をされていましたが、私には河合先生の見解と通じるものがあるように感じられました。

以上、内観セミナー中級編の体験記となります。ご精読ありがとうございます。土橋

沖口比登美さんの体験発表

「DVから幸せになる道のり」を拝聴して



北陸内観研修所

貫井 信恵

2018年5月18日から20日にかけて、第41回日本内観学会大会・第7回国際内観療法学会大会が京都で開催されました。会場の佛教大学は筆者の母校で、懐かしさを感じながら訪れました。恩師に挨拶もでき、この学校や先生方のおかげで今の自分があるのだなあと、しみじみと感じさせていただきました。

さて、大会2日目のランチオンセミナーで、沖口比登美さんの体験発表を拝聴しました。

沖口さんは夫からのDVに悩み、内観を体験されました。セミナーでは、それまでの大きな苦悩を脱却して、幸せな生活を送れるようになった道のりを体験談として語り聴かせて下さいました。感動的な内容だったので、その感想を少し書かせていただきます。

特に感銘を受けたのは、次の三つです。一つは、DV被害というつらい状況の中で、沖口さん自身が内観を体験されたことです。夫だけの問題にせず、自分のこととして取り組まれたのです。二つには、内観して「自分のせいで不幸になっているのなら、自分次第で幸せにできる」と考え、そのための行動を起こされたことです。幸せになるための行動は、自分の気持ちや夫に伝えることで、「嫌なら嫌と言う。耐えられなかったら怒って出ていく。そうやって行動で示すことで夫も分かるようになってきました」と述べておられました。また、「ありがとうに心を込めることができるようになりました。同じ言葉でも感謝の気持ちとそうでないのでは違うということがわかりました」と、ポジティブな感情も伝えておられます。それまでの夫に対する恐怖や怒りを考えると、新しいコミュニケーションの取り方を実践し継続することは、並大抵ではない勇氣と努力が必要だったと思われます。三つ目は、夫を理解し、受け入れようとするその柔軟さです。彼の怒りがどこから来ているのか、相手の立場に立って理解されています。時にその矛先が自分に向かってくることも「あら、また始まったわ」と自分の心を守る対処をしています。沖口さんは内観して多様な捉え方、自分自身を振り返る考え方が身に付いたことを、次のように述べておられます。「車で走っていたら分からないものが、歩いたら分かることもあり。内観によって、相手の全体ではなく悪い面だけを見ていたことが炙り出されました。夫に合わせるだけで、問題解決していない自分に気づきました」。つらい思いをしていると、相手の欠点ばかり目につくことは誰にでもあると思います。しかし、そうになると、相手の良い所まで見なくなると、ネガティブな循環から抜け出しにくくなり、状況を改善するための糸口を掴みづらくなります。内観は、そんな絡まった糸をゆつくり解していくような方法だと思えます。沖口さんが素直な言葉で話すようになり、夫を怖がらなくなると、娘も「このお父さんが良かった」と思うことができ、夫も「今が一番幸せ」と言うようになったそうです。発表の締めくくりに、沖口さんは幸せになった秘訣を教えてくださいました。

①感謝、②I(アイ)メッセージで伝えることの重要性、③少し離れることで冷静になれることです。

ゆつくりと周りを見渡しながら歩くように振り返っていく内観体験。その過程で気づきを得て、問題解決に取り組んでいく努力をされたことで、夫や娘も前向きになられたのです。最後になりましたが、貴重な体験を発表くださった沖口さん、運営された学会の皆さまに御礼申し上げます。

この原稿を書いている間に、内観に多大な貢献をされた三木善彦先生がご逝去されたことを知りました。ご冥福をお祈り申し上げます。

〔記念対談〕 井上ウイマラ(高野山大学教授)×

真栄城輝明(大会長)を拝聴して



大和内観研修所 吉本 千弦

大会の最後を飾るプログラム、高野山大学教授の井上ウイマラ先生と大会長・真栄城先生の対談は、お二人がそれぞれ楽器(ウイマラ先生はギター、真栄城先生は三線)を持ちながら、内観学会ならはのとても柔らかい雰囲気での対談でした。司会の千石真理先生も、ハーブの演奏と歌を冒頭に披露して下さり、その歌声は心の深いところに響いて、内観の持つ目に見えない大切なものを感じさせて頂きました。

対談の前半は、真栄城先生からの質問にウイマラ先生が応えて下さる形で進みました。真栄城先生の直球の質問、「人間は死んだらどこへ行くのか、あの世はあるのか」。また、「ウイマラ先生と内観の出会いについて」、「マインドフルネス」、「スピリチュアルケア、ターミナルケアについて」など、どれも興味深いお話ばかりでした。

ウイマラ先生は「人間は死んだらどこへ行くのか、あの世はあるのか」という質問に対して、ターミナルケアとの関連でお話下さいました。ターミナルケアのトレーニングの場面では、生徒から必ず、患者さんからの来世への質問にどう対応したらよいか質問が出るそうです。「仏教ではこう考えていますというようなアプローチではなく、そのことについて話をしてもらう。それが今回の人生の振り返り、吉本先生が仰っていた棚卸をすることになっていくので、来世をひとつの舞台として、今世についての振り返りをしてもらう。そういうアプローチを教えてください」「仏陀は、来世とは死んだらどこかへ行くという形ではなく、来世とこの世を共に超えるという言い方をされている。今生きている生き方の中に過去も来世もつながっている」とお話し下さいました。

また、内観との出会い・体験については、一週間内観をしたときに、自分に対する内観をしないと納得できないと思う、それを吉本先生に言ったら、「おもしろい！そんなことを言った人はいない。やってみて下さい」と言われ、それをしたことがとてもよかったというエピソードや、お礼奉

公で弁当配りをしたときに、飲まず食わず寝ずの内観を体験したというエピソードなどお話し頂きました。

後半は、スピリチュアルケア・ターミナルケアで死を見て来られた先生が、ご自身のお父様を看取られた時のお話でした。またその時、歌われた自作の曲をご披露下さいました。その亡くなり方、看送られ方は、人間として、理想の亡くなり方だと思いました。ご本人の希望で延命治療はなさらず、自然に食べられなくなると、十日ほどで、家族の皆さんに見守られて亡くなられたそうです。またお誕生日に亡くなられたそうで、皆さんでお祝いもされたそうです。曲は三曲。どの曲も、心に染みわたり、別れの場面なのに、悲しみよりも、それを超えた安らかさと清らかさに満たされていて、会場は感動に包まれました。ウイマラ先生のお父様への感謝の心、今生かされている喜びの心、それは、内観そのものだと思います。

最後は、真栄城先生の三線の演奏と歌。曲は、沖繩の「ていんさぐぬ花」。真栄城先生は、この曲を内観的に解釈されて、親の愛情の深さ、人としての大切なもの(生き方)が歌詞の中にあるとお話下さり、魂を込めて、力強く歌い始められました。その歌声に寄り添うようにウイマラ先生のギターが伴奏し、最後はお二人のセッションが会場を包んで、対談は終わりました。

お二人が歌と音楽を通して、内観の本質的なものを表現して下さいました。感動を胸に抱かれたのではないかと思います。

私は、今回の大会を通して、内観が持つ本筋とは何か、内観の持つ素晴らしさとは何か、なぜ私たちは内観を大切に思い、伝えたいと願っているのかを、改めて感じさせて頂きました。お二人の対談は、その象徴だったように思います。内観に縁のあった皆さんが、大切にされている何かがあります。それは、人によって様々だと思いますが、純粋な何かに触れた時の感動、という点ではひとつのように思います。ウイマラ先生のお名前の「ウイマラ」とは、穢れを離れたという意味で「清浄」という意味だそうです。内観を通して私達はその清浄なものに触れるのではないかと思います。これからの内観も、その点においては変わることはない。そう確信した大会でした。

本大会に携わらせて頂き本当にありがとうございました。準備・運営をして下さった皆様、参加して下さいました皆さま、そして内観を続けて下さっている皆様に心から感謝申し上げます。(合掌)

「第二十九回内観ワークショップin大阪」 に参加・随記

南阿蘇内観研修所 上村 芳信

平成29年9月30日、10月1日の二日間、大阪市にある「ホテル アウイーナ大阪」にて第29回内観ワークショップin大阪が開催された。

大会テーマは「思いやりを育てる」青少年育成。大会テーマに素敵な言葉が添えられた。「それぞれの問題を種にして 世界に一つだけの花を咲かせて、社会に愛の花束を送りましょう」。

僕は前日から大阪入り。榎木美恵子先生から大会数日前に、中国の内観関係者の方々と一緒に病院見学しませんか？とお誘いがあったので快諾。

その際、僕は自分勝手に「大阪市内での病院内 内観施設見学」：「と思いついて入った。その思い込みは、目的地への移動電車の中で、榎木道春先生から修正された。

中国の内観関係者の医療スタッフからの要望で、最新の医療環境を整えている施設を見学したいとの要望から、この企画がある：との事だった。目的地までは何度も電車を乗り換えての移動。その度に道案内役の榎木道春先生は、駅構内を駆け走って切符購入へ。添乗員顔負けの仕事振り、大きな身体で汗を拭き拭き「笑顔絶やさずで、そのタフさには驚かされた。

この移動の間、中国の方々のマナー態度に驚かされたことが：電車内はいつも利用客で込んでいた。電車内で、子供やお年寄りが立っているのを見た時、スッと席を立ち、席を譲られた。：このマナーには脱帽!! 長い移動の間おそれらく中国の仲間も疲れていただろうに：！ 僕も含めて、近くに座っていた日本人の乗客は知らぬ顔。：中国の仲間には頭が下がった。：我が姿を見て恥ずかしい思いがした。

昼の食事は、10人を越える仲間と共に京都駅構内の店で和食を頂いた。食事をしている間、榎木美恵子先生は：中国の方々、刺身が食べられない方がいるのでは？と様子を気にされ、ご自分の食事は二の次。遠来(中国)の仲間の為に、少しでも不自由が無き様にと、一生懸命に配慮に励まれていた榎木道春・美恵子両先生の姿は、大会二日間を通して見させて頂き：思い出深いものとして残った。

【大会一日目】

一日目の講演1は、本山先生の「内観への招待」、講演2は、中国内観学会会長・郝鳳卿先生の「育親内観」、基調講演は、精神科医の中川先生によるナラティブセラピー「自分史」。

演者の講演は、全て通訳者を介して会場参加者達に同時通訳。

講演の先生達が、通訳者と今話している中身を確認しながら話を進めていくと言う時間は、新鮮で聞き取りやすかった。本山先生の講演「内観への招待」の通訳最中に、通訳者が本山先生に「：内観したら何故だか、やる気がみなぎる」と

言われましたが、みなぎるといふことはどういうことでしょうか？」と質問されると、会場から：出て来るとか、湧いてくることかなあと、数人から合の手が入り、会場は暖かい！ 確認する笑い声・拍手が出て、講演の中身への理解がみなぎる契機となった。

中国内観学会・会長先生の講演では、通訳者と意思疎通しながらのスピーチの為か、より分かりやすい丁寧さを感じた。講演中、緊張が走ったことは、講演者が用意していた内容と、スライド映像係りとの調整がうまくいかず、講演の中断が発生。

前の席で聴いていた僕の中には緊張感が走り、ドキドキ。：中断は数分間だったろう。演者と映像係りの方とのやり取り：その微妙な中で会場から、「スライド映像よりも講演者の話したい内容を優先して講演を続けるようにしたら！」と：：：絶妙なアドバイスがあつて、演者も最後までお話しされた。

僕は胸の中で、演者の中国の先生に大拍手した。：予想もなかったハブニングの中で演者の先生は、冷静に最後まで熱意伝わる話口調で講演を続けられた。内観法創始者・吉本先生が、苦闘の日々の中で内観法を世に出して頂いた、その内観法が中国の関係者方々の努力で活かされ、「今中国大陸の地に広まりつつある！」と改めて実感したことは一番大きな収穫だった。総合同会者の榎木道春先生は、講演が中断している間中、おそらく体せんで冷や汗をかきながら、その場の推移を見守っていたことだろうと：その心境を察した。

大会会場の隣部屋では、大阪ライオンズクラブの方々が、日本の伝統文化「お茶」の接待をして頂きました。中国の方々も「茶の文化」を神秘的な面持ちで体験されていた。

【大会二日目】

招待講演は中国上海交通大学医学部教授・王先生の「青少年育成」社会に生きる。：青少年の精神衛生問題及び対策との内容を、資料配布を受けスライド映像という講演。中国の青少年が抱えている問題に触れ、親近感がわく思いがした講演だった。この王先生のご尽力で、内観法が中国医療に内観療法として導入され発展してきている、誠にありがたいことです。

次の講演は、内観シンポジウム「親」。登壇された方は、吉本清信氏、井原彰一氏、真栄城輝明氏の各先生。先生方のお話も面白いが、そのお一人お一人の存在に間近で触れるだけでも幸せを感じる充実感があった。30分間の限られた時間ではあったが、僕にとっては充分すぎる貴重な時間を頂いた思いだった。

最後の講演は、美馬有規子先生の引きこもり支援活動「それでも彼女は生きていく」。難病を抱えながら、子供の育てをしている苦闘連続の話。前を向かれ圧倒される迫力の内容だった。

ワークショップ最後のプログラムで、グループ「ネットバンド」の演奏があった。これはよかった!! 緊張感漂う二日間の大会でしたが、最後に癒されたひと時でした。：。

大阪内観研修所総出での大会を企画運営して頂き：学ぶこと多い大阪でした。有難うございました。合掌

第三十回内観療法ワークショップ in 弘前のご案内

【テーマ】「心ゆるゆる あずましい わたし」

【日時】2018年9月29日(土) 12:30~17:30 9月30日(日) 9:00~14:30

【会場】アソベの森・いわき荘

青森県弘前市大字百沢字寺沢28-29 TEL 0172-83-2215

【主催】日本内観学会

【後援】青森県、青森県教育委員会、弘前市、弘前市教育委員会、青森県臨床心理士会、青森県精神福祉士協会、青森県社会福祉士会、その他

【実行委員長】阿保周子(津軽内観研修所)

【運営】弘前内観めぐみの集い

【事務局】津軽内観研修所 〒036-8245 青森県弘前市蔵主町3
TEL 090-7332-2961 Email naikanwshiro@gmail.com

【アクセス】弘前市街から約30分 青森空港から約50分

【プログラム】

〈9月29日(土) 1日目〉

12:40 講演1「内観とは」阿保周子(津軽内観研修所)

13:10 講演2「精神医療における内観療法の実際」塚崎 稔(三和中央病院)

14:00 「内観実習」林孝次(山陽内観研修所)、竹中哲子(ひろさき親子内観)

「分科会」A「医療と内観」塚崎 稔、河合啓介(国立国際医療研究センター
国府台病院) B「埋もれた記憶の中に眠る生きるヒント」高橋美保(東京大学、
橋本章子(帝京大学) C「内観絵本心理講座」藤 恵子(マザーリーフ)、
光岡亜希子(マザーリーフ) D「依存症のグループ活動」熊澤由美子(秋田
大学)、堀井茂男(慈恵病院)

〈9月30日(日) 2日目〉

9:00 講演3「内観と自分との出会い」高橋美保

9:40 講演4「内観に求める癒し」長田 清(沖縄長田クリニック)

10:30 シンポジウム「内観の可能性を探る」座長:堀井茂男、真栄城輝明(佛教大学
特任教授・大和内観研修所)

シンポジスト:林 孝次、河合啓介、森下 文(奈良女子大学)

13:00 内観体験発表

13:20 「つながる内観」内観への想い、疑問などを率直に話し合おう」長田 清

第四十二回日本内観学会大会のお知らせ

第四十二回大会は九年ぶりに長崎市で開催予定です。来年は新しい元号に変わり、内観学会も新たな気持ちで大会を開催したいと考えております。そこで、次期大会テーマを「内観の現代化―次世代にむかう内観―」といたしました。現代にあった形の内観法の活用と普及のあり方などを討議したいと考えております。一般演題も応募をお待ちいたしております。

日本内観学会主催内観研修会も充実させながら内観法のさらなる発展・普及に取り組んでいきたいと思っております。

日程 二〇一九年七月十二日(金)~七月十四日(日)

会場 長崎大学医学部良順会館(長崎市坂本一丁目)

【七月十二日(金)】

常任理事会 9:30-11:00 理事会・評議員会 11:00-13:00

学会主催内観研修会 13:30-17:30(資格認定の新規・更新申請の方は受講をお願いします。)

大会プログラム(案)

【七月十三日(土)】

一般演題発表

大会長講演 「沈黙の精神療法」 講師:塚崎 稔(三和中央病院院長)

特別講演 「日本内観学会研修制度に期待すること」 講師:小島 卓也(大宮厚生病院副院長、元日本精神神経学会理事長)

メインシンポジウム「内観の現代化」

【七月十四日(日)】

学会シンポジウム 「地域で内観はどのように普及しているのか」

市民公開講座 特別対談「映画作品に観る障がい者像」 松本準平(映画監督)、小澤寛樹(長崎大学医学部教授)

内観体験発表

懇親会 七月十三日(土) 宝来軒別館

事務局 三和中央病院(実行委員長 塚崎 稔)

電話 095-898-7511

FAX 095-898-7588

E-mail info@sanwa.or.jp

四十二回大会ホームページ www.sanwa.or.jp/naikan42/

広報編集委員

木村 秀子(米子内観研修所)
田中 櫻子(こころの相談室 DD 夙川)
本山 陽一(白金台内観研修所)

原稿の送り先

〒108-0071 東京都港区白金台3-13-18 白金台内観研修所
TEL 03-5444-2705
FAX 03-5444-2706
E-mail zan25224@nifty.com